
オモイカラズ

新辺カコ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

オモイカワラズ

【Zコード】

N6381S

【作者名】

新辺力コ

【あらすじ】

風邪で寝ていた少女に、きつねの友だちができました…。

昔々のことでした。ある村に、ひとりの女の子がおりました。女の子の名前は、お紺。優しいけれど、少し体の弱い女の子でした。

ある日のこと、ひと月前にひいた風邪が治らず、お紺は伏せつておりました。立ち上がるといふりふりあし、咳がとまらないのです。

「ンンン…ン…あーあ、せやべる外で遊びたいなあ…」

いい加減、寝てこるものも退屈です。千代絹でも折りつかと手を伸ばしたときでした。

「呼んだの、おまえか？」

と、声が聞こえたのです。

お紺はびっくりして振り向くと、そこにはひとりの女の子がこましだ。お紺とおなじくらこの年頃で、じょりと髪を胸高に結め、髪は稚児髪に結っています。

「おひのじと、呼んだだろ

お紺はぐびを振つました。女の子はぐびを傾げます。

「おつかしいなあ、だつてやつせ』ン、ン、ン、ン、おひのじとが聞こえただ

お紺は可笑しきくなつて笑いました。

「それは多分、さつきわたしが咳をしたんだわ。…ねえ、あなたも『こん』つて『お紺前なの?』

女の子は頷きます。

「『あなたも』つてことは、おまえも『コン』つて『お紺前か?』

「わいよ。他の名前は『お紺』」

「おひさま、きつねの『おコン』だ。おなじ名前なのも何かの縁だから、おらたち、仲良しならないか?」

お紺は喜びました。体が弱く、床に伏せつてこるほどが多いお紺には、あまり多くの友だちがいなかつたからです。

「それじゃ、また来るからな」

「待つてるわ。また遊びに来てね」

その夜、お紺は千代紙で鶴を折りました。
たくさん、たくさん折りました。

(一 番綺麗に折れたのは、おコンちゃんにあげよつ

そつ、思いを込め、たくさん折りました。

次の日、二つ来てくれたかとお手伝いしてお手綱の耳みみ、

「お手綱ー。」

と、娘が聞こえました。

振り向くと、いつからいたのかお手綱が座っています。

「お手伝い、外ばかり見てたな」

「だつて、楽しみだつたんだもん。来てくれるの」

お手綱は、こつと笑い、タベ折つた鶴をお手綱に手渡しました。

「これ、一番綺麗にできたの。お手綱ちゃんにあげる

お手綱は手渡された鶴をしげしげと眺めます。ひとつも嬉しそうに。『綺麗なもんじやなあ…。あつがとひ。ねりも、お手綱にあげるもんがあるんじや』

お手綱は薄紫色をしたいさな花を渡しました。派手な花ではないけれど、可憐でかわいい花でした。

「『龍の鬚』の花じや。珍しくもない野の花だけ、綺麗に咲いておつたから」

「つゆのうね…。野の花なの?」

たんぽぽやれんげ草なら知つてゐるけれど…。

「綺麗…」

「草ばかり高く育つて、田立たん花だから。」うつむいての花だけ見るとき麗じやうたくさん咲いてるから、やじから採つてきた

「見てみたいな。」の花がこいつぱに咲いてるとい

お紺は田を輝かせて言いました。

「風邪がなあつたら、一緒に見に行ひや。やつ遠くなこ原つぱじや

「わあ、嬉しい。約束ね

「うん、約束。げんまんじや」

ふたりは互にゆびきつをします。

「ゆーびきつげんまん、死んだら『メン』。」

ゆびきつをした後、お口が言いました。

「お紺、さやく治るよつこ、元がまじないをかけてやる。すこい効果のあるまじなこじや」

お口は先ほどもひつた鶴を手に取り、ふつと息を吹きかけました。

途端に、千代紙の鶴がまるで生きているもののようにぶり返りを飛び回ります。

「お紺が一生懸命に思いを込めた鶴じや。流石に、元氣で飛びゆる

お紺はただ呆気にとられて、おロンと鶴とを交互に見比べました。
「本当は枯れ葉を使うんじゃ。相手のまわりを二回舞わせる。そうすれば、枯れ葉が病を吸い取ってくれる。…あまり人には術や、まじないをみせてはならんのじゃが…お紺はおらの友だちだから特別だ」

鶴はお紺を気遣つみひまわりをくぬぐるまわり、お紺の手のひらで羽を休めます。

血が通つているかのよつて、あたたかい鶴でした。

その数日後のこと。

お紺はすっかり元気になりました。

「おロンちゃんのまじないが効いたんだわ」

「よかつたの。でも、無理はするな。今日は日差しが強いから

二人は連れ立つて、約束の原っぱに出かけました。

田は高く、きらめくと輝いています。

「おーい、『竜の巣』がたくさん咲いとるんじゃ」

そこは、お紺も何度か来たことがある場所でした。
春に、たんぽぽやねんげ草をつみに来たこともあります。

「…………。気がかなかったなあ」

「春に咲く花は田立つが、夏の野の花は余り田立たぬものが多いんじや。おまけに、これは草にかくれておるから」

お口にはガサガサと草をかき分けます。

「…………、これじや。秋になつたら緑色の、つやつやした実が出来る」

真冬は、わっと綺麗なんじや……。と、お口は花をなでました。

「真冬にも、花が咲くの?」

「こや、実のほづじや。真冬になつたら緑色だつた実が、青く熟すんじや。おまえの知前どおなじ、紺色に」

「珍しいね。赤じやなくて、青く熟すなんて」

「とつても……綺麗なんじや……」

お口はもつ一度咳をまつた。その口調はどこか寂しげなものがありました。

お絹は心配げに声をかけます。

「お口ひやん……? びづかしたの」

「こやこや、何でもない。……『龍の鬚』は、咳止めの薬にもなるんじや。少し腫つてこべか」

くぬつと振つ返つたお口は、もう寂しげな感じはありませんでした。

「わあ……綺麗。本当に綺色だわ」

季節は、冬になつてきました。

濃い緑の、小さなトンボ玉のよつた実を見つけてお組はせしゃ‘あます。

「知らなかつたなあ……冬の草が、こんなに綺麗なんて。お門かやん、ありがとうございます」

お門へせ、じりとひつむことこま。

「お門かやん……どうしたの？」

「……お組。……おひ、わづおまえと遊べないだ

お門は肩を震わせてこました。田田、涙がこぼれて溜まつています。

「おひ、隣のヨリ……嫁口になつただ

「お嫁口……？」

「仕方ねえだわ。きつねの娘は、冬になつて『龍の鬚』の実が熟すとき……嫁口にいくだ。……お組。おまえは大きくなるのよ、長い時がいる。けど、きつねは冬がきたら、やひ、おとなど」

「お口にいらっしゃん… もう、あえないの… ？」

お紺はポロポロと涙を流し、お口を覗つめます。
ひゅうひゅうと冷たい風が、頬を叩きました。

「…オモイカワラズ…」

不意に、お口が聞こえました。

「思ひ、変わらず。『竜の髭』に込められた言葉じや。おまえを友だちとして、大事に思つとる。嫁口にこつても、その思ひは変わらん」

「お紺も、達者で、しあわせに暮りや。…約束じや…」

お口は、小指を出しました。
ゆびきりです。あのとき『竜の髭』の花を見にこいへ、と聞こあつたときのやつ。

「ゆびきり、げんまん…」
「死んだら『メン…』」

雲一つない青空に、雨が降つてきました。暖かな雨が、ぱぱぱりと
一人を濡らしました。

「狐の嫁入りだ」

その言葉を言ったのはじりだつたのか……。

あれから、長い時が過ぎました。お紺は大きくなり、隣村にお嫁になりました。

支度が整い、家を出ゆひました、そのときでした。

はいはい、はいはい……

薄紫色の、可憐な花吹雪が降り注ぎます。
あのとわ、おコンがくれた花。友だちのしるしにくれた『竜の鬚』
の花が。

「……おコンちゃん……」

「…………まだ嬪殿の顔も見てないのに、泣く人がありますか」

お紺はポロポロ涙を流しました。暖かい涙を。

山のふもとに、少女がひとり立っています。
帯を胸高に締め、髪を稚児髪に結った少女が。

微笑みを浮かべ、肩に千代紙の鶴をちょんと休ませて……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6381s/>

オモイカワラズ

2011年10月8日19時52分発行